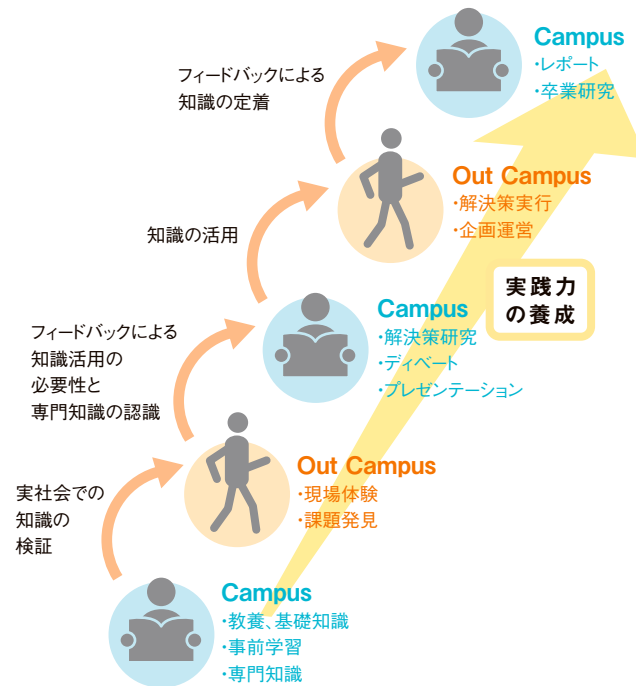




学生数/約1800人
学部/総合経営、人間健康、教育
大学院/健康科学

コミットする課題	▶現場体験を通じた、学生の知恵、スキルの養成 ▶若者の地域定着を促し、地域の活性化につなげる
取り組み	▶地域企業や行政の現場で学ぶ「アウトキャンパス・スタディ」の実施 ▶「地域づくり考房『ゆめ』」を通じた、学生の地域連携活動の支援 ▶高校が実施する「地域人教育」等への協力
連携組織体制	▶大学全体として連携活動をマネジメントするため、地域連携委員会(教員組織)、地域連携課(事務組織)を設置
資金調達(補助金含む)	▶大学本来の活動であるため、教育研究活動費より支出
指標	▶志願者数 (=地域からの大学の評価) ▶県内就職率 (=地域からの学生の評価)

地域の企業、自治体、商店街の現場で学ぶ「アウトキャンパス・スタディ」



若者の地元定着から地域を変える人材育成へ

CASE STUDY

松本大学

「地域貢献」という教育理念の下、地元に着し、地域を担う人材育成を続ける松本大学。この20年の成果と、今後の展望を聞く。



地域連携推進委員会委員長
総合経営学部 観光ホスピタリティ学科長
白戸 洋

しらとひろし ● 慶應義塾大学経済学部卒業後、建設コンサルタントで海外プロジェクトの財務分析等を担当し、JICAの調査等にも参加。1999年松商学園短期大学専任講師、2002年松本大学総合経営学部助教授、2006年教授、2020年より現職。

地域の「未来の仲間」を地域や高校と育てる

大学周辺の畑に放置された余剰野菜に気づき、リヤカーで移動販売。その体験を通じて、買い物弱者の存在や流通の問題に目を向ける学生——本学は2002年の開学から、このような地域を学ぶの場とする教育を続けています。

学生を地域に出すのは、「知恵を身に付けさせるためです。かつて大学が力を注いできたのは、知識を授けることでした。今は「知恵」「知識を使って生き抜く力、社会を変える力」を与えることが求められています。この「知恵は経験の中で身に付けるほかありません。さらに言えば、キャンパスの中だけで学ぶのなら、都会の大学のほうが魅力的。地方大学としては「都会では学べないもの」を提供する必要があります。

開学以前、長野県の大学進学者の県内残留率は全国最低の7%。若者の地元定着が課題でした。保護者は子どもを都市部に出す意識が強く、一方、地元に残った若者はコンプレックスを抱きがちでした。当時短大部の教員だった私は、「地元でがんばりたい」という若者を増やさない、この地域の未来はないと強く感じたのです。短大だけでは限界があるため、教員有志で地域を担う人材を育てるために本学をつくったのです。

とはいえ最初は、地域の中で学ぶという教育は、地元からは理解されず、学生募集も大苦戦。その経験から、大学で教育するだけでなく、県内の高校生に地域を担う意欲を育てることの大切さに気づいたのです。中でも資格取得中心の教育から地域マーケティング教育へとかじを切った商業高校との「地域人教育」での連携は、ファンになった高校教員が異動先でも広めてくれたため、多くの高校とつながりができました。

地域の中で活動すると、多くの生徒や学生は失敗し、迷惑をかけることもあります。しかし、実は失敗したほうが教育効果は高いのです。地域住民にはそんなときは、彼らを叱ってくれと頼んでいます。このように高校から始める地

域連携教育は、若者を「未来の地域の仲間」として育てる、地域、高校、大学の共同PJなのです。

地域の仕事を「つくり出す」人材の育成に着手

徐々に地域からの信頼が生まれ、学生募集も10年を過ぎたころから安定しました。県内出身者の8割は県内で就職します。地元志向の若者が増え、結果的に本学を志望する学生が増えたのは、高大連携の成果も一因と言えます。一方で、これからは地元企業や役所といった既存の組織の中で活躍する人材を輩出するだけでなく、地域の資源を生かし、新たな価値を生み出す起業家も育てなくてはと考えています。というのも、若者の地元定着には、「自分で仕事をつくり出してでも残りたい」と思える地域にすることが必要だからです。そうした教育を提供する大学院の設置準備も進めています。

若者はすぐには役立たないけれど、彼らが地域に関わると、それをきっかけに地域自体が変わり、元気になる。大学の本務は教育です。これからも「地域の若者を地域で育て、地域に返していくこと」こそが地域貢献と考えるべきです。

連携先に聞く!



大学が持つ知見を高校に広げて「地域人教育」を充実したものに

オーアイディー-おさひめ
飯田OIDE長姫高校 教諭 國松秋穂

▶「地域人教育」で企画した地域活性化イベントの様子



市と大学の協力があって実現する「地域人教育」

本校は飯田市、松本大学と連携協定を結び、商業科で「地域人教育」に取り組んでいます。これは、生徒が「地域活動→地域の課題発見→その解決のためのアイデア・企画出し→企画の運営→報告書の作成」というプロセスを体験する学習プログラムです。この中で、松本大学にはフィールドワークのやり方の指導や最終報告書の講評のほか、さまざまな面で協力をいただいています。

例えば、1年次の最初のフィールドスタディは、松本市の上土(あげつち)商店街で実施します。ここは普段、松本大学の学生が学びの場としているので、生徒たちも安心して活動することができます。また、生徒が企画を立てる際、企画の実現性を白戸先生に相談する機会を設けているのですが、ここでも豊富な知識、経験をふまえた有効なアドバイスをいただいています。生徒だけ

でなく、われわれ教員が大学に研修を受講しに行くこともあります。地域での実践的な教育を長年続けてきた松本大学は、本校にとってなくてはならない存在です。

フラットな関係で「育て合い、学び合い」を

商業科の大学進学率はあまり高くないのですが、この地域人教育で地域活動に魅力を感じ、松本大学に進学する生徒も出てきました。じっくり育ててもらっている点にも信頼を置いています。

地域を支える若者の育成は、地域全体の課題です。高校の地域人教育だけで実現できるとは当然、考えていません。もちろん大学だけでも難しいでしょう。高校、地域、大学が共に若者を教育する仲間としてフラットな関係を維持し、これからも「育て合い、学び合い」を続けていきたいと考えています。

*同校の取り組みの詳細はP.32を参照